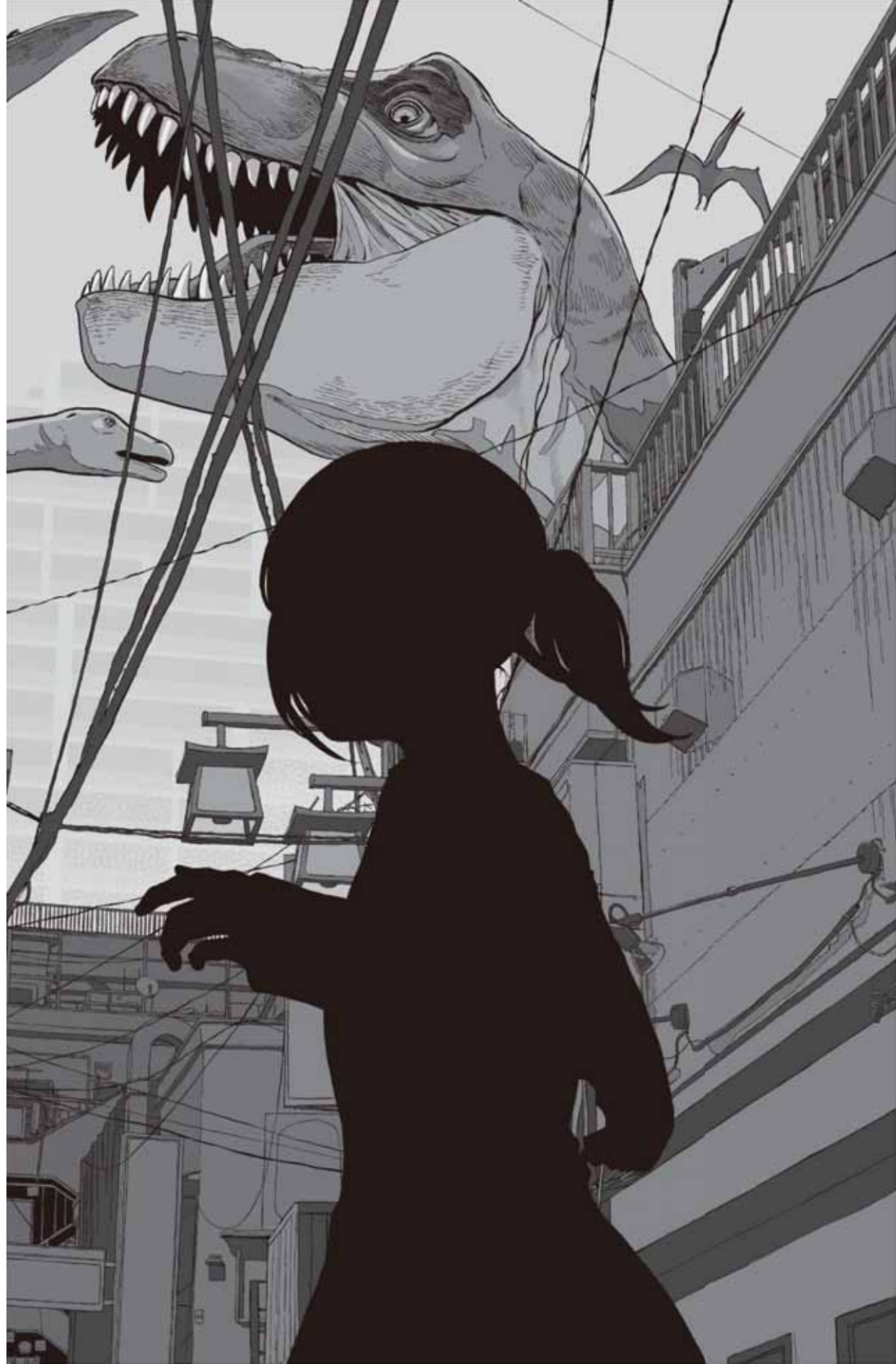


放課後の ジュラシック

あか つめ ひ みつ
赤い爪の秘密

もり あきまろ
森晶磨 / 著

た なかひろたか
田中寛崇 / イラスト



プロローグ / 004

第一章 はじめに恐竜あり / 006

第二章 赤いつけ爪の謎 / 030

第三章 追跡はむずかしい / 056

第四章 東京ジュラシック区 / 088

第五章 おたずね者 / 120

第六章 夜の図書室 / 140

第七章 おとり作戦 / 159

第八章 一生の不覚 / 174

第九章 大恐竜激突と
忘れられていた例の謎 / 194

エピローグ / 218



プロローグ

うらかな日曜の午後、中野セントラルパークの芝生に横たわって見上げる青空はサイコーだ。でも、その青空を背景に眺める樹羅野白亜の横顔はもつとサイコー。翼野雄一はそう思った。

「もうほんと、言葉もないくらい。白亜ちゃん……好き、です……」

こんな気持ちを抱くのは、幼稚園の頃に恐竜図鑑を見たとき以来だ。雄一は、同じクラスの白亜に恋している。といっても、いま眺めている横顔は本物じゃない。学校で販売されていた林間学校のときの写真をこっそり注文して手に入れたものだ。

「何時間見ても飽きないもんね、この写真。不思議だ……マジ神秘……」

そんなことを一人でぶつぶつと言いながら、ふとその写真の背後に広がる青空にふたたび目が留まった。何かが浮いているのが見えたのだ。最初は鯉のぼりが風に飛ばされてきたのかと思っただ。でも季節がちがう。今は三月だ。もう一度しっかりと空を見た。

ウソだろ……。

雄一が見ているのは、へびよりもワニよりも巨大で、羽をもった長い長い生き物だった。

そいつは、羽の使い方がわからないみたいなのに、奇妙で下手くそな飛行を続けていた。
雄一にはすぐにわかった。あれは、クラスの男子たちが目撃したと騒いでいるドラゴンだ、と。



第一章 だいいっしょう はじめに恐竜きょうりゅうあり

1

トオルさんの話はなによれば、この世界せかいにははじめに恐竜きょうりゅうがいたらしい。恐竜きょうりゅうは地上ちじょうの王おうとなり、さまざまな土地とちでその土地とちに適応てきおうする形かたちで進化しんかをとげた。どの場所ばしょでも強い者ものが弱い者ものを食べ、血ちと肉にくに変かえては次の弱い者ものを探さがした。

「まあ、そういう意味いみじゃ、人間にんげんより先に人間にんげんみたいなのをしてたわけだね」

トオルさんはそう言いってクールに笑わらいながら、ハイスピードで部屋へやの隅々すみずみまで掃除機そうじきをかけた。次に、わざわいがあった——とトオルさんは、今度こんどは窓拭まどふききをしながら、眉間みけんに皺しわを寄よせて話はなした。「わざわい」というのは、何か良よくないこと。それが何なんなのかは、トオルさんにもわからないらしいが、いろんなことが言いわれている。隕石いんせきが落ちたとか、火山かざんが噴火ふんかしたとか、海うみが酸性さんせい化したとか、やたら寒さむくなったとか、ほかにいろいろ……。

「たしかなことはね、白亜はくあちゃん、まあ何なんだかんだあつて恐竜きょうりゅうは表舞台おもてぶたいから姿すがたを消けし、さらにそ

これから何だかんだあつた後に人類が主役ヅラをする世界が幕を開けたってことさ」

トオルさんは「恐竜が絶滅した」という言い方は避けて、「表舞台から姿を消した」と言う。

それを聞いたたびにわたしは、まるで舞台の裏があるみたいじゃないの、と思う。もちろん、そんなことをトオルさんは考えていないだろうけれど。

かくして恐竜サイバル時代は終わって、霊長類が出現し、人類が食物連鎖の頂点に立つこの世界ができあがった。人類はすごい。飛行機にテレビに、コンピューターまで作りだして、いよいよ今度はAI（人工知能）だというのだから、いったいどこまですごくなる気なんだろう。子どものわたしでも、そのすごさには舌を巻く。まあ、わたしの舌は短いんだけど。

「人類すごい」はたしかにそう。ええすごいですとも、と思う。問題はこの退屈な日常だ。世界のどこかでは今日も戦争が起こっていて、この国だって例外じゃないらしいってことは何となく頭ではわかつてはいるんだけど、いまこの瞬間がすつごく平和なせいかな、あくびが止まらない。平和は素敵なものだと思うけれど、退屈は返上したい。

わたしは樹羅野白亜。十一歳。全校の女子の中でいちばん背が高いことを少し気にしているだけの、どこにでもいる小学五年女子だ。

住まいは、中野駅から徒歩十分、中野通りと早稲田通りの交差点を左折してちよつと行った先

の住宅街。歩いてすぐのところ「中野ブロードウェイ」があるのはひそかに自慢。ここはサブカルチャーの聖地とか言われているけれど、わたしの印象では屋根裏にしまわれた古びた玩具箱を漁っている感じ。とくに用がなくても、行くと何となく楽しい。

わたしの通う中野区立ひかり小学校は春休み目前。春休みが終わったら、いよいよ六年生。来年には中学に上がるらしいけれど、中学に上がったってワクワクドキドキの日常が待っていないことはだいたい想像がつくよね。今までどおり授業中の眠気との戦いは続くだろうし、そのうえ部活動まで始まって忙しくなるだろうし、親は「受験勉強」の四文字もちらつかせてくるはず。

男子はどうかな？ 今よりもうちよいオトナになってくれればいいけど、まあ期待はできない。どうにも彼らは子どもっぽいのよね。

男子たちは、いつだってウンチだとかオツパイだとか、一日中叫んでいればそれでご機嫌なんだから。きつと中学生になったら悪化するな。退屈なうえに厄介なことだけ増えそう。やれやれ。

わたしはこういうとき、現実から逃げたくて『ジュラシック・パーク』のDVDを観てしまおう。一九九三年に公開されたステイヴン・スピルバーグの大ヒット映画。こう書くと、恐竜大好き少女みたいだけれど、全然ちがう。逆だ。わたしは、恐竜が、きらいなのだ。

きらいだけど、いや、きらいだから、観てしまおう。自分が恐竜のいる世界にいたら、と考える

と、ゾツとして足がすくんで鳥肌が立ってくる。以来、『ロストワールド／ジュラシック・パーク』、『ジュラシック・パークⅢ』、『ジュラシック・ワールド』にいたるまで、ぜんさく全作観ている。

『ジュラシック・ワールド』は映画館で観た。パパは、「おまえと恐竜映画を映画館で観る日がくるなんて夢のようだ」と言っていた。パパは恐竜少年だったらしくて、『ジュラシック・パーク』からぜんぶ映画館で観てきたらしい。

で、わたしも小さい頃からパパに恐竜映画を観せられて育ったもんだから、パパは誤解している。仕方ないよね。恐竜ぎりらというわりに、わたしはあまりにもたくさん恐竜映画を観まくり、恐竜図鑑や恐竜のフィギュアを買いまくってきたんだもの。これで恐竜がきらいだなんて話しても、理解されるわけがない。だから我が家のなかでは結局わたしは「恐竜少女」で通っている。



そんなわけで、わたしはその日の午後も恐竜映画を観ていた。

三月も半ばを過ぎた、何も予定のない日曜日だった。三日後には六年生の卒業式があつてその数日後には春休みになる。完全に気分は一足先に春休みモード。

本当は、区立図書館に本を借りに行こうかなとも思った。あそこの図書館司書の零楠さんという人がたいへんかつこいいのだ。色素の薄い顔に縁なし眼鏡をかけていつもキーボードを叩いて、こちらに気づくと、低音ボイスで「何かお探ですか」なんて聞いてくれる。

けれど、あいにくこの日は外に行く気力がなかった。それで自宅映画鑑賞だ。

居間にある大型テレビで観る恐竜映画は大迫力だ。『ジュラシック・パーク』のテイラノサウルス登場シーンでは、毎回わかつているはずなのに鳥肌が立つ。恐竜映画だけは、大画面にかぎるな、といつも思う。

わたしは氷のたつぷり入ったグラスにコーラを注ぎ入れ、ポテトチップスを皿いっぱいに出して、映画館気分です居間のソファに陣取った。

セットしたのは、『失われた世界』という古い恐竜映画のDVD。原作はコナン・ドイル。ア

マゾンの奥地に、ひそかにまだ恐竜たちの世界が残っているってお話。古い映画だからさすがに迫力には欠けるところもあるけど、まだCGの技術がない時代にトカゲやワニを恐竜に似せるべく、背びれなどをつけて撮影したというその光景を想像すると、なんだかゾクゾクする。

でも観始めて十五分で一時停止ボタンを押す。さすがに十回も観ている映画だとなかなか気分が乗らないこともある。腰を上げて、DVDの棚を物色しはじめた。

ほかの恐竜映画にしようかな。『恐竜伝説ベイベー』のタイトルが目にと留まる。悪くないんだけれど……スピルバーグが恐竜映画なんか作らなければ、どの恐竜映画も許せたのにな、という感じだ。

考えてみれば不思議なことに、いまだに『ジュラシック・パーク』レベルの恐竜映画ってないのよね。誰も興味が無いのか、作ろうとしても難しいのか。

お、『トレマーズ』いいなあ。怖いし。ちよつとケビン・ベーコンが若くてかつこいいし。でも恐竜じゃないよね、厳密には。『アナコンダ』はいい出来だけど、ヘビだしね。やっぱり、恐竜の何とも言えない怖さって、この世にすでにいないけど、かつてこの世界を牛耳っていたっていう「伝説の親分感」が理由だと思う。その「親分」が今はもういないはずなのに、よみがえっちゃったつとところにヤバさを感じちやうのだ。

「また観てるのかい、恐竜映画」

気がつくのと、背後にある食卓の椅子にトオルさんが座っていた。トオルさんはいつも気配を消して現れる。忍者みたい。トオルさんは背が高く、ほっそりしていて、いつも姿勢がいい。そして、いつ見ても、コーヒーを飲んでいる。よつぼどコーヒーが好きなのね。

いま起きてきたところなのか、ちよつぱり眠たそうだ。もう午後二時だけれど、夜中に働いているらしいトオルさんにとっては朝みたいなものだ。目覚めたばかりなのにニット帽にサンングラスを着用しているのも、いつものこと。

「んん、でもどれも何回も観ちゃって、飽きちゃったかな……」

トオルさんには気兼ねせずにも何でも話せる。何しろ、物心ついたときには家にいた人だから。

「『ウォーキング・ウィザ・ダイナソー』は？」

トオルさんは立ち上がって長い腕を伸ばし、棚のいちばん上に置いてあるDVDを取り出してわたしの目の前に持ってくる。

「ナンセンスの極みよ。恐竜がしゃべるのよ？ そんな恐竜、怖くもなんともない」

わたしの答えの何が面白かったのか、トオルさんは大笑いしながらDVDをもとの棚に戻した。

「そうか、しゃべる恐竜は怖くないか。そいつはいい。白亜ちゃんは、怖いから恐竜映画を観て

るのかい？」

「そうよ。怖いから観ちゃうの」

「観なけりやいいのに」

「退屈なのよ。平和主義だけど、退屈は死ぬほどきらい」

トオルさんはまた笑った。

「白亜ちゃん、平和はクールな進化だぜ？」

「クール？ ぜんぜんそうは思わないけど」

平和がクールなものなら、退屈だけはスイッチをオフにしておいてもらいたいものだ。

「君にはまだわからないだろうが、恐竜の時代、大型哺乳類の時代、人類の時代と、いずれにわたつても戦いはつねにあったんだ。もしも、君の半径五十メートル以内が十年以上戦いもなく過ぎているとしたら、それだけで奇跡に近い進化なんだ。戦わずに暮らせるというのは、人類以外の生き物は経験したことがないはずだ。大半の生き物は死ぬまでに最低でも指で数えられるくらいの戦いを経験する。白亜ちゃん、君は戦いを経験したことがある？」

「……ないけど」

「じゃあ、進化だ」

「そんな退屈な進化、いらぬい」

わたしの言葉に、トオルさんは笑ったけれど、どこか悲しそうでもあった。

「殺されるような目に遭ったことがないからそんなことを言うのさ。一度でもそういう目に遭ったら、人は誰だって退屈のありがたさを実感するさ」

「なるほど。つまり、トオルさんは退屈を愛しているのね？」

「もちろん。もしも退屈がそのへんに落ちてるなら、お金を出してでも買うね。手元になぬから」

「……ふうん」

それって裏を返せば、トオルさんの日常は退屈どころじゃないってこと？ そういえば、トオルさんってどこか影があつて、昼と夜とで別の顔を持つていそうな雰囲気があるのよね。想像に過ぎないけれど、トオルさんは人に言えないような、危険な仕事をしているんじゃないだろうか。

表向き、トオルさんの職業は私立探偵。でも、本当はスパイとか、スナイパーとか、大泥棒とか、殺し屋なんてこともあるんじゃないか、なんてわたしは日々考えている。

ムーミン谷の旅人、スナフキンがちよつと似ているかな。優しさを冷凍庫でちよつと固めてクールにした感じとでも言えぬいいのか。とにかく影のある男ということ、わたしのなかでは小

学校がっこうに上あがるか上あがらないかの頃ころから結けつ婚こんしたい男おとこナンバーワンなのだ。

おかげでそれ以来いらい、同級生どうきゅうせいの男子だんしにまったく興き味みがなくなつてしまった。パパはそんなわたしを「マセガキ」と呼よぶけれど、べつにマセてはいない。正常せいじょうな判断はんだん。こつちに興き味みがあるからつて、いちいちからかつてくる男子だんしと、遠とほくを見みつめて進しん化かについて語かたりつつ、素早すばやく窓拭まじかき掃除そうじをする男おとこのどつちに魅ひかれるつて、ふつうに考かんがえればそりや後者こうしやに決きまつているんだから。

男おとこの子こはわかつていない。いつになつたらわかるんだろ？ 中ちゅう学がく生せいになつてもわからないなら、絶望ぜつぼう的てきじゃないの？ この世よに生うまれて十年じゅうねん以上いじょう経たつてるのに、女おんな心こころがわからないなんて。

まあそれはいいわ。トオルさんはわたしの家いえに居い候こうしているんだもの。わたしは毎日まいにちでも理り想そうの男だん性せいをじつと眺ながめていられる恵めぐまれた環かん境きょうにいるわけで、いちいち同級生どうきゅうせい男子だんしのからかいに眉まゆをひそめる必要ひつようもない。

でも問題もんだいがひとつ。トオルさんはわたしのことなんか眼がん中ちゅうにないつてことだ。

「まあそんなわけだから、俺おれは平和へいわな恐竜映画きょうりゆうえいがを推すい薦せんしておこう。はいこれ」

「え……」

トオルさんがわたしに手渡てわたしたのは、平和へいわすぎる恐竜映画きょうりゆうえいが、『REX 恐竜物語きょうりゆうものがたり』だった。わたしはにっこり笑わらつてそれを柵たなに戻もどした。

「白亜、そろそろ好きな男の子とかできないのか？」

夕食の席で、パパが尋ねてきた。パパは小説家。ファンタジー、ミステリー、ホラー、何でも書く。ふだんは書齋に籠もりつきりだけけど、夕飯のときだけはこうして食卓に現れる。

いつも寝ぼけ眼で、三秒置きにずり落ちそうな眼鏡を指で押し上げている。ふだんは自分の書いている原稿が行き詰まったとか、編集者の設定した締め切りがキツイとか、そういう愚痴をママに言っていて、わたしには恐竜の話題しか振らないものだから、いまの質問はたいへん珍しい。



トオルさんがチラッとパパの顔を見上げてからコーヒーを啜った。

「唐突ですね、薫さんは」

樹羅野薫。パパの名でありペンネームでもある。そして、パパより十歳は若いであろうトオルさんは、自分の仕事のほかに、この樹羅野薫のために物語のプロットに矛盾がないかチェックする作業も請け負っていた。プロットというのは、小説を書くための設計図みたいなものらしい。二人はビジネスパートナーであり、飲み仲間でもあるのだ。

「唐突つてことはないよ。今度は六年生になるわけだし、色恋に目覚めてもおかしくない」
トオルさんはそれ以上は何も言わずに、ふふつと口元に笑みを浮かべた。

「いないし」

とわたしは短く答える。わたしの不機嫌な態度に驚いたのか、ママが慌てだした。

「もうパパつたら、そういうのはデリケートな話題なんだから、食卓で聞くようなことじゃないわよ。で、白亜、好きな人いるの？」

パパをたしなめてくれたんじゃないのか。何だかんだ言つて二人はグルだから油断できない。ママに内緒と言つても翌日にはママが事情通な顔をしていることもあるし、その逆もある。

「いないよ。うちの男子ガキっぽいもん」

「あなたもまだガキじゃないの」

ママはいやなことを言う。そしてぜんぜん言葉の定義をわかっていない。

「レベルがちがうって。男子のガキっぽさは異常。だって、ドラゴンを見た、とか言ってるのよ？ もう低次元にも程があるわ」

すると、なぜかトオルさんがその言葉に反応した。

「ドラゴン？ ドラゴンを見るのが低次元なのかい？」

「え、だって存在しないし」

「薫さんの小説には出てくるよ」

パパがそうだそうだというふうにならずいた。パパのデビュー作にして、現在まで続編が刊行されている人気シリーズに『竜とルベウス』というファンタジー小説がある。

規則だらけでいつも白い服ばかり着せられるお城の暮らしに嫌気が差した王女ルベウスは、ある日森で傷ついたドラゴンを助けて友だちになり、旅に出て自分のカラーを取り戻す、というストーリー。

「パパの小説は大人なラブロマンスなんだぞ。なあ、ママ」

「いやですよ、あなた」

ママが頬を染めたのは、パパが『竜とルベウス』を書いたのがママにプロポーズするためだったから。パパはドラゴンとルベウスの関係に当時のママと自分を重ねて書いたんだって。聞いてるこつちが恥ずかしいわ。

「でも、あれはしよせん小説でしょ？ リアルの世界でドラゴンを見るわけないし。やつぱガキよ」

「たしかにあれは小説だけど……」

それ以上トオルさんは何も言わなかった。わたしは、ありもしないものという意味で、「小さいおじさんを見た」も「ドラゴンを見た」も同列に考えていたけれど、トオルさんはそう思っていないみたいだ。

「じゃあ聞くけど、トオルさんはドラゴンを見たことがあるの？」

恋愛の話題から離れたくて、わたしはトオルさんに尋ねた。トオルさんは「ふむ」と言っただけで元の皿のハンバーグにフォークを突き立てた。同じ食卓にいても、トオルさんには毎度わたしたち家族とはべつのメニューが用意されている。豆腐とかグルテンを使ったハンバーグだ。ほかのものを出してるのを見たことがない。栄養が偏るんじゃないかとわたしが一度心配したら、ママに「大丈夫よ、ママが栄養はちゃんと管理しているから」と言われた。あのハンバーグのなかに

必要な栄養が入っている、と。たととしても、毎日同じって飽きないの？

「見たことないよ」トオルさんは口に入れたグルテンハンバーグを飲み込むと、コーヒーでそれを流し込む。「でも見たいと思ったことならあるし、本当に見られたのなら、うらやましい」

トオルさんの言葉に、パパが深くうなずいた。

「日本にはむかしから竜神さまがいるし、恐竜って言葉にも竜が入っているからドラゴンみたいなもんだ。それに見たという人には見えたんだから、馬鹿にするのはよくない」

「そんなこと言ったら何だっけそうじゃん。幽霊を見た人にとっては幽霊はいた的な」
子どもの頃、幽霊を怖がるわたしに「幽霊なんかいないよ」と教えてくれたのはパパなのに。
「そうだよ。見た人にとっちはいたんだな。でもないと思えば消える」とパパ。

「んん、おかしい。ムジュンしてる、ムジュン」

わたしが仏頂面をしていると、トオルさんが割って入った。

「この世のものは、あまねくいると思っただけ。だから、ドラゴンを見たという子には実際に見えたんだろうね。もしかたそういう噂話を聞いたら教えてくれよ。俺も見たい」

トオルさんにこうまで言われては、それ以上男子を馬鹿にもできず、わたしは黙ってしまった。

あーあ、つまらない。それもこれもパパがへんな話題を振ったせいなのに。

話題はそれからパパの仕事の話に移った。パパの話は長いうえで現実感が薄いのが難点。いつも「東京でどんな魔法が使えたら便利か」とか「警察に気づかれずに犯罪を成立させるには」とか、普通の人が聞いたら哑然とする話題ばかり。どれもわたしには関係がない。

トオルさんはパパの話にあいづちを打ちながらも、何やら考え事をするみたい指の爪をトンとテーブルで小気味よく叩いた。これはべつのことを考えているときの癖。

そのとき、ふとトオルさんがサングラスを外し、窓のほうを見やった。トオルさんがサングラスを外すのは夜になってから。目が弱いつて本人は主張している。

トオルさんの目は切れ長で、わたしはその感情のない目がかなり好き。いま、トオルさんの目は大きく見開かれていた。見開くと通常の二倍ほど大きくなり、黒目が縦に細くなったような感じになる。気のせいとは思うんだけれど。

なんてことを考えていたら——あれ？ トオルさんが席から消えている。そんな馬鹿な、と辺りを見回すと、いつの間にかトオルさんは窓辺に移動していた。そして、窓に張り付いている蛾をそつとつまみ上げると、窓を開けて蛾を放つて逃がしてやった。

「ママさん、食後の栄養剤、いただけますか？」

「……あ、そうね。取ってくるわね」

立ち上がりかけたママを手で制してパパが立ち上がり、栄養剤を取りに二階へ上がっていった。栄養剤があるのは、二階のわたしの部屋の隣の食品庫。そこにはお酒や長期保存用のインスタントラーメンのほかに、ゼリー飲料、そしてトオルさんの栄養剤が置かれている。

だけどトオルさんが食後の栄養剤を求めるとは珍しい。いつもはグルテンハンバーグだけのトオルさんだけれど、ときどきそれだけじゃ足りないことがあるらしくて、そういうとき、パパが栄養剤を食品庫から出してくる。ふつうに食事をすればいいのに、とわたしが以前パパに言ったら、「トオルさんはね、からだが弱いんだ」と教えてくれた。

でもわたしはそれは違うと思っっている。からだが弱い人が、いまみたいな素早い動きができるわけないもの。パパが栄養剤を持ってくると、トオルさんはそれをゴクリと飲んでようやく落ち着いた顔になった。まるで蛾を捕らえたせいでからだが必要としたみたいに。

ひと心地つくくと、トオルさんはわたしに尋ねた。

「今日はいい休日になったかい？」

「イマイチ」

トオルさんは笑った。もう目はいつものサイズに戻っている。

「白亜ちゃん、東京という街は、平凡でつまらないように見える。でも本当はいろんなことが目にも留まらないスピードで進んでる。つまらないと思うかどうかは、白亜ちゃん次第なんだよ」

「わたし、次第……?」

「そう。なにしろ、君の頭にはたっぷり脳みそが詰まっている。そうだろ? これだけの容量があつて世界を楽しめないとしたら、それは白亜ちゃんに問題があるのさ」

「そんなこと言われても……」

「俺が白亜ちゃんに初めて会つたのは、君が幼稚園生の頃だったね」

ある日、怪我をした男の人が家の居間に横たわつていた。

パパはスプーンで何か柔らかかそうな食べ物と彼に与えていた。わたしに気が付くと、その人は一瞬目を大きく見開き、奇妙な甲高い声を上げた。

——大丈夫だよ、トオルさん。あの子は僕の娘だ。

——む、す、め……。

まるで言われたことの意味がわからないみたいにして、男の人はきよとした顔をしていた。わたしはなぜかその顔が気に入って、にこにこしながら近づいていき、膝のうえに乗った。

すると、その人はようやく緊張を解いて、わたしの頭を撫でた。

——白亜、トオルさんはこれから僕たちと一緒に暮らすことになると思うよ。

パパはにつこり微笑んだ。わたしを安心させるための笑い方だった。でも、そんな笑顔がなくても、わたしはひと目見たときからトオルさんを気に入っていた。

あの、生まれたときからたった一人で何もかもを決めて生きてきたような孤独な表情。

その眼差しは冷たくも、まっすぐにわたしの心に到達した。

「あのときね、俺は思ったよ。こんなキラキラした目の子がこの地球上にいるなら、まだまだこの世界も捨てたもんじゃないってね」

「えっ……」

思わず頬が赤くなった。トオルさんはいつものように、わたしの頭をポンポンとかるく叩く。

「だからもうそんなつまらなそうな顔をしちゃだめだ」

「うん……」

キラキラした目——か。

たしかにあの頃、わたしの世界に「つまらない」なんて感情はなかった気がする。

戻れるだろうか。あの頃みたいな感覚に。

「わたし次第、ねえ……」

自室に戻っても、トオルさんに言われた言葉がずっと胸に残っていた。

でも最近、とにかくつまらないのよね。しじゅうつまらないと感じるし、実際に口に出しても言ってしまう。それが自分の心ひとつだと言われても、じゃあどうすればいいの？ 退屈の壊し方なんて学校で習っていないし……。

担任のクボっちは、いじめも見えて見ぬふり。登校拒否の子も放っておくし、勉強頑張ったからってそれほど褒めるわけでもなし、たまに言うギャグはいまひとつ冴えない。つまり、担任に面白さを求めるのは無理。

クラスメイトはどう？ これも代わり映えしない。女子は女子でやたら寄り固まって、アイドルとか好きな男子の話とか、あとは化粧の仕方についてや新しい髪型、近くにオープンしたファストフード店やプリクラの新機種の話などなど、まあようするにどうでもいいことばかりしゃべっている。総じてくだらない。

男子はもうさつきから言っているとおりガキっぽいし下品でお話にならない。くだらなさでは

女子に負けず劣らずだ。そんなわけで、どちらにも期待できないわたしがいる。

じゃあわたし自身は？　これがまったくもって無趣味。習い事はどれも長続きしなかったし、唯一の取り柄といえば勉強がクラスで三本の指に入るくらい。でも、べつに勉強が楽しいわけじゃない。やりたいことなんか何も無い。テレビゲームも好きじゃないし、インターネット検索もそれほど楽しめない。知識探求意欲というのがそもそも低いのね、たぶん。だから結局、恐竜が趣味、という不本意な結果になってしまう。

いまこうして部屋でだらりと過ごしているときも、わたしは恐竜の図鑑をぺらぺらと眺めている。わたしがまだ五、六歳だった頃は、恐竜といったら爬虫類の祖先という印象が強かったけれど、研究の成果によるものか、最近発売された図鑑の恐竜はどれも鳥みたいに毛が生えている。それが本当の姿と言われれば、そうなんだろうな、と思うんだけど、なかなか実感がわかない。

まあ『ジュラシック・ワールド』はいまだに爬虫類の祖先としての恐竜で世界観を作り上げてるし、わたしも信じたい世界を信じればいいのかもしれない。こうして眺めていると、だんだん自分が恐竜をきらいなのか好きなのか、わからなくなるときがある。恐竜は怖い。でも、怖いからこそ、すぐドキドキする。

それこそ、つまらない日常に恐竜でも現れてハラハラドキドキの冒険でも始まれば退屈から抜

け出せるのに、なんて、パパのファンタジー小説でも出てこないような馬鹿げたことはよく考える。まあ実際ありえないけどね。

ハラハラドキドキの冒険なんて夢のまた夢……夢の……ん？

「そうよ、そうだよ」

そうなのよ。とても当たり前前の話。

わたしに欠けているのは――。

「……冒険すればいいわけね」

単純なことではないか。なんでこんな単純なことをわたしは思いつかなかつたのだろう。

そんなに退屈なら、謎を見つけに行けばいいだけじゃないか。面倒くさいとか動きたくないとか、何だかんだと理由をつけては「つまらない」に収まっていたかっただけは自分自身。たしかにトオルさんの言っていたとおりにかもしれない。

わたしは明日の計画を立てることにした。明日の授業が終わるのは午後四時。そこから探偵でもやってみよう。

探偵か。トオルさんみたい。でも探偵って具体的に何をやるの？ わたしはトオルさんが探偵の仕事をしている姿を、じつは一度も見たことがない。昼間のトオルさんは、ソファで寝そべっ

ているか、パパが書いた小説のプロットをチェックしているかのどちらかだ。

トオルさんがよく、「薫さんのプロットはずぼらでアラが多いんですよ」と言っているのを聞く。言われたパパは冷や汗をかきながらアハハと笑って「編集より厳しいんだよなあ、トオルさんは」などと言っている。トオルさんは注意力がすごい。探偵が何をするものかはよくわからないけれど、とにかく人一倍注意力がなくちゃならないのだろう。

そういえば、部屋のなかもいつもきれいに掃除してくれるし、窓に虫がいたりすると、いつも誰よりも早く見つけて飛んでいく。ああいう瞬発力もきつと重要なのね。

一度だけ、探偵という職業にちよつとばかり興味をもつて「わたし手伝いたい」と言ったこともあった。でも、トオルさんは「子どもに手伝わせるわけにはいかないな」と言うばかり。子どもには手伝わせられないような危険なこともするのが探偵なのね、きつと。

「注意力と瞬発力が必要で、なおかつ子どもには手伝わせられない危険な職業、か……」
ますます退屈を駆除するのに向いている職業な気がしてきた。トオルさんはわたしに手伝わせないと言っただけで、わたしが自分で探偵をやる分には構わないよね？

問題は、わたしにはよくテレビで見るような「依頼人」もいないし、そのへんに事件が転がっているわけでもない、ということ。

まあ、この際さいぜいたくは言いつていられない。

小ちいさな謎なぞでもいいから、身み近ぢかなところから謎なぞを集あつめてみよう。それをひとつひとつ解かい決けつしてい
く。これだけでもだいぶ日常にちじょうは変かわるんじゃない？ 何なにごとも、為なせば成なるつていうもの。

第二章 赤いつけ爪の謎

1

翌日の放課後、さっそくわたしは学校に残った。ふだんなら家が近い美代ちゃんとクラスの男子の愚痴なんかを言い合いながら帰宅するけれど、美代ちゃんには先に帰つてと伝えた。

「どうしたの？ 居残り……じゃないよね？」

「まさか」

わたしがそんな間抜けな目に遭うわけがない。わたしはくわしくは話さずに、美代ちゃんと別れ、音楽室に向かった。音楽室といえば怪談の定番だし何か事件らしいことがあるかも、と思つたからだつた。

でも、これが完全に当てが外れた。十分待つても、二十分待つても、何も起こらない。

モーツァルトもベートーベンも、目がきよろきよろすることもなければ、笑いかけてくることもない。勝手にピアノが鳴り出すことも、CDが回り出すこともない。その手の怪談はやつぱり

誰かがウソを言つて広まるんだらうな。

そもそも謎つて何？ どういうのが謎なの？

そこから考えなきやならないのか。

たとえば、いつもあるはずのものがなくなるとか、いつもはそこにはないものがあつたりとか、あとは何か壊れていたり、そういうちよつとした日常とのズレだ。もちろん、もつと大事件だつたらそれこそ大歓迎だけれど、そういうことはたぶん起こらない。

だから、とにかくごく小さな事件よ。アリの穴から堤も崩れるというけれど、ほんの小さな日常の謎から、少しずつ日常が溶けていったりするかもしれない。

よし、では気を取り直して、お次は理科室。

理科室には、嘉納先生がいた。うちの学校では、基本は担任が授業を受けもつけれど、理科や家庭科みたいな専門科目だけは教科担任制が導入されている。だから我がクラスの理科はこの人が担当。

通称、イノセン。カノウというより異能だから「イノウ」先生、略してイノセン。男子たちの尊敬の念が込められている。でもわたしはあんまり好きじゃない。たしかに科学への愛はすごいし、授業の教え方も丁寧でわかりやすいけれど、実験が楽しくて、ついでに教師をやっているつ

て感じなのがどうも……。それがいいと男子なんかは言うんだけど、わたしはそこまで理科にのめり込めないから、ちよつと苦手。

「あ、イノセン……：こんにちは」

「どうしたの？ 君はええと、たしか、今度六年生の樹羅野白亜さん……。お父さんの新作はま
だかな？」

イノセンもパパが作家だつて知つてるのか。そりやそうよね。校長が全体集会で「中には樹羅野さんのお父さんみたいな自由な仕事に就く人もいますが、あまり夢を見ないように」なんてことを言つたりしたから、学校中にパパのことが知れ渡つてしまつたんだもの。

「まだもう少しかかりそう……。かな」

書齋から唸り声が聞こえるから、きつとまだまだかかるだろう。

「そうか。一読者として楽しみにしていますと伝えてね。ところで、もう下校時間は過ぎてるのに、何をしてるのかな？」

イノセンこそ何をしているのだろう。ずいぶんいい香りがする。彼はいま、ピーカーをアルコールランプで炙つて沸騰させているところだった。

「いやあ、なんとなくぶらぶらと。イノセンは何してたの？」

「ん？ コーヒー作つてる。タンポポコーヒー」

「あ、シーズンだ」

「そう、シーズン」

そっか、この匂いはあの悪名高きタンポポコーヒーの匂いだつた。

この時期になると、毎年のようにイノセンはタンポポコーヒーを作っている。男子生徒はそれを飲むのが好きみたい。味は「ピミヨー」とみんな口をそろえて言う。まあ、物珍しいし、何となく楽しいというのにはわからないではないんだけど。わたしは飲んだことないが、匂いだけは悪くないと思う。

「どう？ 飲む？」

「え、遠慮しときます……」

「あそう。まあ、あんまり説教臭いことはいいたくないけど、早く帰ったほうがいいよ。夕暮れ時はいろいろ危険なことが多い。ここ中野区は東京の中じや比較的治安のいい街だけどね、それでも昼と夜ではべつの顔になる。四時下校にしているのは、そういう時間になる前に生徒たちを帰りたいからなんだよ」

イノセンが教師っぽいことを言うと、何となくウソくさいと思ってしまうのは、わたしの問題

かイノセンの問題か。まあ、視線がタンポポコーヒーのピーカーに注がれているせいかな。しょせん他人ごとと思ってる感じが伝わってくるのだ。

「説教されなくてもそろそろ帰るよ。ただこう……何か面白いことないかなあ、とか思ってたさ」

「面白いことはね、理科の教科書に書いてあるから。まずは家でじっくり読み返すといいよ。そこから君の世界は大きく広がるはずだ」

ああまた始まった。この脱線が苦手なのだ。

「了解、失礼しましたー！」

わたしは理科室を飛び出した。さわらぬ神に何とやらだ。

そそくさと出て、さてお次は——。図書室か、体育館か、と迷ったけれど、ちよつとゆつくり考えるためにも校舎の外に出て散歩でもするか、と考え直した。日中は春風がずいぶん吹き荒れていたけれど、それも落ち着いて、だいぶぶらつくのにいい気候になってきた。

もういよいよ春休みだ。春休みが終わると、今度は六年生……一年後には卒業かあ。そんなことを考えて校庭をぶらぶらと歩いていたら、ふと梅の木に目が留まった。

この学校の梅の木は、ときどきカメラマンの人が写真を撮りにきたりするくらいちよつと風変わりな恰好をしている。木の幹が、まっすぐ生えずにぐんにやりと横に曲がっていて、さらに地

面に接した枝から根が生えて、まるで昼寝から起きたばかりの竜みたいに見えるのだ。こういうの（臥竜梅）っていうらしい。根つこの部分がちょうど竜の足で、横に曲がっている幹の部分が竜の背。

男子なんか、しよつちゆう勇者ごつことか言つてこの梅の木にまたがつたりしている。でもアイツらはこの木のことを桜だと思つているみたい。ちよつと間抜けだよ。

わたしは自慢じゃないけれど、梅の花と桃の花の区別がちゃんをつく。当たり前だと言われそうだけれど、桜はわかっても、梅の花と桃の花をこつちやにしている人は案外多いのだ。

桃の花がひとつの枝にいくつも生るのに対して、梅の花はひとつと節にひとつと決まっている。そうそう、こんなふうに……とそのかたちを目で追ううちに、おや、と思つた。

「なに、あれ……」

梅の木の、（竜の後ろ足）に当たる根つこの部分に、ちよこんと赤いハイヒールが一組置いてあるのが目に入った。

なんでこんなところにハイヒールが？

それも、きちんとそろえて置いてある。

わたしはしゃがみ込んで、そのハイヒールを手にとってみた。そのサイズは二十三・五。子ども

もにとつてはだいたい大きいけど、大人の女の人からしたら平均的なサイズなんじゃない？

ちなみに——わたしは二十四センチ。

この歳にしてはだいたい大きい。ちよつと気にしている。

まあそれはべつにいいんだけれど、それよりこんなところにハイヒールを脱ぎ捨てたのは誰？

裏に名前とか書いてあつたり——？

「なんて、あるわけないか」

半笑いでハイヒールを逆さにした。すると、

中から何か落ちてきた。

赤い小さなものが、ぱらりと落下してグラウンドに着地した。ハイヒールの中に隠されていたのだろう。赤いつけ爪が、ぜんぶで十個。人間の手の指の数とおなじだ。



いくら小学生といたって、同級生の女子たちがお洒落に興味を持ち出してコスメがどうのと話したりもするから、つけ爪くらいは知っている。昔から母親がするつけ爪を興味津々で眺めていたし、こっそりつけて「魔女」なんて言つて、ひとりであひよひよと喜んでいたこともある。

これは誰が何と言つたつて、女性用のつけ爪。ほかの何かなんかではない。

なぜこんなものが梅の木に？

梅の木の根——あるいは竜の足——にハイヒールやつけ爪を置くといいことがあるなんて迷信も占いも聞いたことがないし、カラスを撃退する効果だつてないだろう。

いまのところしつくりくる動機が思いつかないけど、たしかにこれらはそこにあった。

これは謎だ。

謎認定。こんにちは、日常の小さな謎。平凡な入口に見えるけれど、ありきたりな毎日から抜け出すとても大事な一歩かもしれない。そう信じてみよう。

わたしはランドセルの中からメモ帳を取り出すと、謎を書き込んだ。

Q 《竜の足》に赤いハイヒールと赤いつけ爪を置いたのは誰か&なぜか？